

## 活躍する同窓生

## マンガでプロデビュー



高寺 稔

「漫研」OBの高寺稔さんが、これまでの努力が実ってプロデビューを果たしました。高寺さんは経済学部入学後本格的に漫画を描き始め、漫画研究会の主幹も務めました。1999年に卒業後、その年の4月には「週刊少年チャンピオン」編集長奨励賞を受賞。同年8月プロデビューを果たし、すでに2作品を発表しています。漫画との出会いからプロデビューまでを語ってもらいました。

絵を描き始めたのは小学校4年生くらいだったと思います。きっかけは校内でのイラストコンクールでイラスト賞をとった喜びでした（賞状もないような賞でしたが）。中学校ではコマを割った漫画を鉛筆でノートに描いて、友達や兄に見せましたが、どんなに下手でも絶対にはげなそう、褒めてもらったことが続けられたことにつながったと思います。このころ、「将来は漫画家になります」とクラスで発表した記憶があります。高校に進学すると体育会系部活で忙しく、漫画家になるという意識は薄くなり、進路など現実も迫っており迷いました。それでもクラスに漫画家や小説家志望の友達がいる、漫画は描きつづけていました。友達に恵まれた環境だったと思います。

結局なんとなく大学に入学して、漫画研究会に入会し、初めて漫画中心の生活になりました。漫研の先輩や友達

に恵まれ、ここで初めてGペンやスクリーンペンといった漫画道具を教えてもらい、初めて「漫画という形」の作品を描きました（いままでは落書きですね）。それも作品として残る漫画は4年間で150ページにしかすぎません。1年生になり「現実」を肌と感じ就職活動もしましたが、時代なのか運命なのか、単に力不足なだけなのか就職先も決まりませんでした。この際、やりたいことはやってみようと思いい、卒業するまでの4か月で4作品、86ページの漫画を描き投稿しました。4月には「週刊少年チャンピオン」の賞をもらい、担当の方がつきました。賞の位置

週刊少年チャンピオン1999年40号  
[ドラック・ラデ]練習カット

づけは高くありませんでしたが、これがきっかけになり、これまで2つの読み切りを発表しています。

漫画のテーマは10代、20代の人間の悩みや楽しさなどをエンターテインメント性を持たせて描くことです。

漫画の世界では、私くらいの実力と立場の人はほとんどいません。でも、やりたいことを見つけ、それで生きていくと決めたからには、勝ち組になりたいと思います。いまはアルバイトをしながら描いていますが、漫画家意識を高くもち、努力していきたいと思っています。

全国の人に読まれる漫画というものは、社会や個人に影響力をもつと思うので、作品に責任をもち、描いていきたいと思っております。

今後、私の作品を読んで、何か感じていただければ幸いです。



[フンカン・モチーフ]週刊少年チャンピオン21号表紙用カット